

第38回情報理論とその応用シンポジウム (SITA2015) 予稿集 原稿様式

How to Write a SITA2015 Manuscript

SITA2015 事務局*
SITA2015 Secretariat

Abstract— This document provides information on a SITA 2015 manuscript.

Keywords— SITA2015, L^AT_EX, style file

1 はじめに

本稿には、SITA2015 予稿集の原稿の作成・提出に関する情報が記載されています。

2 予稿集用原稿の作成

投稿された PDF 原稿ファイルをそのまま USB メモリに収録して予稿集を作製します。また、原稿の著作権は、電子情報通信学会に帰属します。シンポジウム Web サイト (<http://www.ieice.org/ess/sita/SITA2015/>) に掲載してある注意事項を厳守して、PDF 原稿を作成して下さい。

2.1 様式

- サイズ A4 判 (縦 297mm, 横 210mm)
- 論文題目, 著者名, あらまし, 本文等全てを含み最大 6 頁
- 論文題目が英文の場合は, 前置詞と冠詞を除き, 単語ごとに一文字目は大文字
- 印刷時の上余白 25mm 以上, 下余白 20mm 以上, 左右余白 17mm 以上
- 2 段組, 10pt 程度の文字
- PDF ファイル容量 3MB 以下

SITA2015 原稿の L^AT_EX スタイルファイルおよび Word 用テンプレートが, SITA2015 ホームページ

<http://www.ieice.org/ess/sita/SITA2015/>

より入手できます。

2.2 ヘッダ

PDF 原稿の第一頁において, 上余白 9mm(以上) 右余白 9mm(以上) あけ, 7pt 程度の文字で

The 38th Symposium on Information Theory
and its Applications (SITA2015)
Kojima, Okayama, Japan, Nov. 24–27, 2015

* 〒 700-8530 岡山県岡山市北区津島中 3-1-1 岡山大学工学部電気通信系学科, Faculty of Engineering, Department of Electrical and Communication Engineering, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama-shi, Okayama, 700-8530, Japan. E-mail: sita-2015@mail.ieice.org

と記入して下さい。第二頁以降にヘッダは不要です。スタイルファイルを使用している場合, このヘッダは自動的に挿入されます。

2.3 第一頁に記載する事項

第一頁に次の事項を記載してください。

1. 本文が和文のとき

- 論文題目 (和文と英文の両方)
- 著者名 (和文と英文の両方)
- 著者の所属, 所在地 (和文と英文の両方)
- あらまし (約 100 語の英文)
- キーワード (英文で 3~5 個)

なお, 和文のあらましとキーワードは必要ありません。

2. 本文が英文のとき

- 論文題目 (英文)
- 著者名 (英文)
- 著者の所属, 所在地 (英文)
- あらまし (約 100 語の英文)
- キーワード (英文で 3~5 個)

2.4 カラー, 写真について

SITA2015 予稿集は, USB メモリで発行しますので, カラー (写真) の使用も可です。ただし, 白黒印刷をして利用することも考えられますので, 白黒印刷でも内容の把握が可能であるようご配慮ください。

3 論文投稿方法について

原稿は PDF ファイルでご用意下さい。論文原稿は発表申込専用サイトで受け付けます (SITA2015 ホームページ <http://www.ieice.org/ess/sita/SITA2015/> よりリンクが張ってあります)。

論文投稿システムに関するお問合せは,

sita-2015-submit@mail.ieice.org

までお願い致します。

3.1 注意事項

原稿が指定の様式を満たしていることを確認して下さい。なるべく複数のシステムで PDF 原稿が閲覧・印刷できることを確認しておくことと確実です。

文献

- [1] SITA2014 Secretariat, “How to write a SITA2014 manuscript,” The 37th Symposium on Information Theory and its Applications, 2014.